

「12人の使徒を選ぶ」

2015年05月29日

ルカによる福音書 6章12節～16節。 そのころ、イエスは祈るために山に行き、神に祈って夜を明かされた。朝になると弟子たちを呼び集め、その中から十二人を選んで使徒と名付けられた。それは、イエスがペトロと名付けられたシモン、その兄弟アンデレ、そして、ヤコブ、ヨハネ、フィリポ、バルトロマイ、マタイ、トマス、アルファイの子ヤコブ、熱心党と呼ばれたシモン、ヤコブの子ユダ、それに後に裏切り者となったイスカリオテのユダである。

主イエスは祈るために山に登られた。イスラエル人は、海はカオス、混沌の場として恐れたが、山は神が臨在する聖なる場と見なした。「シナイ山」はモーセが十戒を受けた代表的な神の山である。主イエスは神が臨在する山に登って、一晩中祈られた。主イエスは祈りの人であった。祈りは静的な行為であるが、行動を生み出していく。神と対話する祈りが主イエスの激しい宣教生活を支えたのである。朝方、弟子たちを呼び集め、12人を選び「使徒」と名付けられた。「使徒」は「遣わされた者」という意味である。どんな価値基準で選んだのか、よくは分からない。言えることは、選ばれた弟子たちは皆、無学なただの人々であったということである。ペトロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネはガリラヤ湖の漁師であった。彼らはガリラヤ人気質を受け継いだ素朴で、勇敢で、律儀で、血の気の多い壮年、青年たちであった。ヤコブ、ヨハネは「ボアネルゲス（雷の子ら）」とニックネームがつけられているから、すぐに怒る激しい気性だったのであろう。

フィリポはギリシャ名で、ユダヤ名はない。両親がギリシャ文化に憧れ、息子にギリシャ名をつけたのであろうか。彼は理知的な現実主義者である。バルトロマイについては記述がない。マタイは徴税人であった。ローマへの税を徴収する徴税人は「罪人・売国奴」と見なされ、ユダヤの共同体から排斥されていた。マタイは主イエスに呼び出され、人間であることを認められ、喜んで従っていった。トマスは復活を信じないとだったので「疑い深いトマス」と言われているが、主イエスと「一緒に死のうではないか」と言った人で、愛に殉じる心の持ち主であった。アルファイの子ヤコブ、熱心党のシモン、ヤコブの子ユダについては記述がない。「熱心党」はローマの支配に反抗し懐に短刀を隠し持ち、ローマ兵に隙あらば、殺害しようとする熱烈な愛国主義者であった。シモンにとっては、徴税人マタイはローマの手先で、殺したい人間であっただろう。そのシモンとマタイが共に弟子になっていることは興味深い。弟子たちは似た者同士ではなく、相反する立場の人々を含んでいた。このことが、主イエスの宣教団を生き生きと活気づけていたのではないか。

イスカリオテのユダも選ばれている。ユダが主イエスを裏切った。「裏切った」はギリシャ語では「売り渡した」である。聖書は、売り渡したユダへの憎しみが増幅され、悪人として描かれている。謎の多いユダに関して、諸々の説がある。しかし、主イエスの十字架によって、ユダも赦しの中に置かれていることは確かである。ユダと同じ心の闇を持つ私たちも救われているからである。

主イエスの弟子たちは無学なただの人、そして多様な人々であった。十字架の前で一度は挫折したが、復活の主イエスに出会い「遣わされた者」として、福音宣教の使命を全うする者に変えられ、殉教していった。主イエスに選ばれた者は神が責任を負ってくださるということである。